

また、事業参加者がネットワークのメンバーとなっていくことも特徴である。当事者ゆえ、共に創っていくことを大切にしていける活動だからこそ、活動に共感し、集いの場の参加者がスタッフ側として参加することも多く、ゆっくりではあるが地域に浸透し、常にひろがりをもっている。発足から3年を経過した現在、乳幼児を抱えて活動するメンバーのほか、子どもが成長し小学生の子をもつ親も増えたことから、活動も乳幼児対象のみだけでなく幅をもった活動に変化してきている。

次に、地域づくりに発展しつつある点である。さまざまな活動から、地域の市民同士が繋がり、期待するばかりでなく、自らが主体的に関わり創っていくことの必要性、そして1人では出来ない事も、あわせれば実現するという事のすばらしさを実感するとともに、子育て期の親として不安を抱え自信のない生活から、社会性を持って関わる事ができたこと、そのことが『孤立から個育てへ』と繋がるきっかけとなった。尚且つ同じ体験をするものゆえの共感をよび、やがてその共感は「問題意識」へと変わり、内なる力となり成長し、地域づくりへと発展している。

第3に子育てにおける課題が見えてくることである。子育ては乳幼児期だけのものではないが、不安や孤立感が強くでる乳幼児期の親が、それらを軽減し、安心して子育てできる環境整備の必要性を求めていることは自分達の経験でも実感した。そして親の気持ち、心の充足度は、その後続く子育てに大きく影響することもわかった。活動することで、常に今後の課題が見えている。

3. ASAKAいくじネットワーク事業参加者の感想

ASAKAいくじネットワークで開催する事業（つどいの場として「子育てひろば」「Happy Baby」、その他、フェスティバル、育児講座、講演会、学習会など）の参加者に感想を書いてもらっている。事業を通して参加者が何を求め、何を感しているのか。その感想の一部を紹介し、他の感想と合わせその中から多く出る言葉を抽出し、ネットワーク活動の機能を検討した。

(1) Happy Baby（赤ちゃんサロン、0～1歳児親子の集いの場）

この事業は、特に親自身の環境の変化や育児の不安や悩みが大きい乳児をもつ親を対象にした集いの場である。テーマトークもあり、おしゃべりが中心だが、育児についての気づきを得られるなど、とても意義の高い需要の多い集いの場である。

- ・ 自分の子だけかな？と思っていることを気軽に聞いて、聞いてみたら意外とみんな同じでホッとしました。そして赤ちゃんの数だけいろいろな子がいるんだな—と思いました。
- ・ とても楽しく過ごせました。子どももとても喜んでいました。色々な人と接する事でとても励みになりました。
- ・ 少し上のお母さんの体験談が聞いて、今自分が不安に思っていることが時間が経てば解消したり、こうすればよいんだというヒントになったりしました。子守唄は自分で作っても良いんだ、自分流でも良いんだとわかりました。
- ・ いろいろの月齢のお子さんがいて楽しく拝見していました。人それぞれ赤ちゃんにも個性があり、悩みがあるんですね。
- ・ いろいろな同世代のお母さんのお話が聞いてとても楽しく参考になりました。楽しく育児をしていても行き詰まる時もあるけれど、この場に来てなんだがんばろ—と励まされました。
- ・ 子どももそれぞれなんだな—とつくづく感じたのであせらないようにしようと思います。

(2) 子育てひろば（子育てサロン、対象年齢のない地域のつどいの場）

この事業は、おとなも子どもも誰でもが気軽に集える場。Happy Baby（0, 1歳親子）のように対象を限定していないことから、異年齢、異世代交流もあり、年齢層も幅広いことが特徴である。

- ・ いろいろなことがわかった。参考になった。
- ・ 同じような親との会話で不安が減った。
- ・ 上の子ども近所で遊ぶ友達がまだ居なく、主人も仕事なので、思いきって連れて来てよかったです。ストレス解消できました。また機会があったら参加したいと思います。
- ・ たくさんのお話ができてよかったです。子どもも広いところで遊べるので楽しんでいるようでした。また参加したいです。
- ・ 歌や手遊びもあり、地域の情報交換ができるので楽しみにしています。子どもも大きいお兄ちゃんお姉ちゃんと遊べるので、楽しいみたいです。
- ・ いろいろなお母さんの話が聞けて自信をもてたりして、自分自身のはりあいにもなります。
- ・ 毎日家で遊んでいると親は楽だけど子どもは他の子と遊ぶ機会がないと思い、これではいけないと思い参加しました。小さな子から自分の子どもに近い子がいて、私もいろいろな人と話せたし、子どもも他の子を見るだけでも（一緒に遊べなくても）楽しめたと思います。
- ・ とても楽しい時間が過ごせました。上の子が前回参加した時とても喜んでいたので、今回も参加しました。下の子ども普段は大きいお兄ちゃんお姉ちゃんばかりなのですが、ここにくると自分と同じくらいの子や自分より小さい子がいて楽しいようです。

(3) 感想のまとめ

参加者の感想において、出現頻度の高い言葉は、「不安が減った」、「自分だけじゃない」、「参考になった」、「ほっとした」、「話が出来た」、「情報交換」、「気分転換になった」、「友だちができた」などであった。

これらの言葉から、事業の効果として考えられることは、次のとおりであった。

1) 育児不安の軽減

孤立しがちな現代の親子は、子育ての様々な悩みや不安、ストレスを抱えている。それらは現代の子育て環境における、情報過多による不安、頼る人が身近に居ない、少ないこと、子育て仲間が居ないこと、など複数の要因が絡み合って起因している。軽減するための助言を求めているのも事実だが、その多くは、不安や悩み、自己否定感など様々なことを「自分だけじゃないんだ」と認識し、共感を得ることで、育児不安はかなり軽減する。それは専門的な指導ではなく、同じ親たちのおしゃべりの中でこそ出来るものである。確かに親同士が誤った情報を共有してしまう危険性もあるが、それ以前に不安を軽減し自らが気づける環境を、決して押し付けの答えではなく創っていくことが可能で、育児不安の軽減に効果を発揮していた。

2) 地域でのコミュニケーションと地域づくり

「子育てひろば」では同世代同士の共有と、異年齢、異世代と触れ合うことでも気づきを得ていた。親もさまざま参考になる光景を目の当たりにでき、且つ子ども自身の体験もあり、異年齢交流も現代のコミュニティーでは中々難しい昨今、子育てひろばでの空間は日常では得られない体験ができたことで、地域の顔が見え、安心感を得るとともに地域での人間関係をもつきっかけとなった。

前述したが、事業に参加することで、子育てを共有できる子育て仲間が多くもてるのが育児不安の軽減になっていたが、「共有」は相手の考えを理解することができ、さらに自分と同じなのだというこ

とから肯定感を得ることにつながっていた。また、よりよいものを求める動きにつながり、そのことが「不安→不満」で終わりではなく「問題意識→課題」と捉え、解決に向かい行動することにつながり、事業への参加だけでなく、活動への参加につながっていた。

D. 考察

1. 「子育てネットワーク」の必要性

今の子育て期の親たちは、一度は就労経験を持つ者が多い。社会人として生活をする日々から、出産を契機に居住地域中心の生活へと変わる。以前とは一変し社会との交わりも減るようで、排他的に感じる生活を送っている人も少なくない。また、核家族が多い現代では、自分自身が赤ちゃんや小さい子と過ごす経験がないまま親となり接するという状況も伴う。現代の子育ては、環境の異なる生活の中で手本となるものも無く、悩み、不安を抱えながら、人間に極めて重要な「子育て」が営まれていくという現状である。

特に、地域的に都心から近く、都市化が進みマンションも乱立している地域では、住環境も昔とは違い機密性も高いものになっており、時間が違えば近隣住民とも顔を合わせることなく生活が出来てしまう。「同じマンションに同じような年齢の子が居たと知らなかった」と、入学を機にわかったという声をきくことも、しばしばある。このような孤立しがちな環境であるからこそ、個と個の繋がりをもつことには、とても大きな意味があると考えられる。従来「ネットワーク」の意味するものは、複数の団体が1つの取り組みを通じ繋がっている事であったようだが、近年は「個（点）の繋がり、1人ひとりを結ぶ」ことを意味している。繋がりをもち、その繋がりが広がっていくこと＝「ネットワーク」はさまざまな行動範囲もひろがり、新たな出会いも多くなり、視野を広く持てるきっかけを得やすい。しかし、先にも述べたように、物理的に中々地域住民とも関わりをもてないことやコミュニケーション能力が不足している場合、ネットワーク化も何かきっかけがないと形成しづらい状況となっている。

一方、情報ツールは益々発展し、パソコンや携帯電話、メディアからの情報は多く、これも人との関わりをもたずに生活ができてしまう状況となっている。特に情報過多は、子育てへの影響も大きい。情報が多いということは、選択肢も多く選りすぐれるメリットもあるが、逆に惑わされることにもなる。情報が多くあると、どれが必要なものなのか判断がつかない中では、間違った情報を選択してしまう可能性も大きい。

そのような中、「子育てネットワーク」は、主に子育て中の親たちが抱える、子育ての不安や問題意識から生まれたと言える。子育て中の親同士が集まり、話をする中で、その不安はひとりだけの考えではなく、多くの人を感じていたことだと共有できたことから始まった。それは間接的ではあるが、子育て期には中々得がたい「自己肯定感」を生んだのである。さらに多くの人と共有できた事は「不安→不満」で終わりではなく、「問題意識→課題」へと考える発展をみることができた。それは「独りでは実現出来ないことが、複数となら出来る」という意識の芽生えである。また、「求めているもの、必要と感じるもの」への実現に向かった行動は、子育てネットワーク誕生の大きな原動力となった。まさにASAKAいくじネットワーク発足のきっかけとなった背景そのものである。従って、街全体での子育て、次世代育成への取り組みを厚くしていくことが重要と思われる。特に地域的に乳幼児人口が多い地域では急務である。

2. 子育てネットワークの活動成果

事業への参加者の感想から、「不安が減った」、「自分だけじゃない」、「参考になった」、「ほっとした」、「気分転換になった」など、育児不安の軽減に効果がみられ、「話が出来た」、「情報交換」、「友だちができた」など地域での人間関係が醸成された様子が、活動の成果と考えられる。また、当事者が問題意識を持ち、課題解決のための取り組みの原動力となったものは「今必要で求められているもの」という意識である。ネットワークによる「子育て」の孤立感からの解放は、とても大きなパワーとなり、課題解決のため一步一步進み、当事者のニーズに即したものを展開している。

子育てネットワークは、当事者による自主的な活動であり、その強みは、「一人ひとりのやる気を合わせると実現できる」「モチベーションも高く、必要性から発生しているのでクオリティも高く優れている」である。子育ての当事者として、また実際の参加者の両面からみても、企画や情報の内容・スタッフの姿勢など全体において住民の満足度が充実している点は事実である。まさにニーズそのものだとはいえる。これは、行政が実施する事業や行政主導で展開される住民活動とは比較できないほど有効性が高いと思われる。従って、行政や専門職は、これらのネットワークとの協働活動（事業）や活動支援を積極的に進めることが必要である。

3. 子育てネットワークの活動方針

孤立しがちな子育ての中で、様々な悩みや不安、ストレスを抱えているが、その多くは決して答えを求めているものではなく、ただ話をしたい、聴いてほしい…そんな思いが強い。ネットワークが開催している「子育てひろば」や「Happy Baby（赤ちゃんサロン）」は、「答え」を出す場ではなく、いろいろなことを話すことで、「共に考えることでの共有、新たな気づき」、これが子育て当事者の不安な気持ちを解放し、新たなパワーともなっている。そして、仲間づくり、広い視野の獲得などを気づくよいきっかけとなっている。決して押し付けのアドバイスやケースにはめた指導ではない。それは逆に心を閉ざすことにもなりかねない。自身で気づき、視野をひろげ、今必要で正しい情報を選択できる能力を養うのは、「共有」することがもっとも大切なことである。

ASAKAいくじネットワークの活動目的は、「共に育つ」である。自分達も親である。子育てという次世代を担う人の営みにとって重要なことに携わっている者として、子どもたちに、そして自分たちにとっても、人の心のある、あたたかい街づくりを望んでいる。そして、それを待っていても出来ないということに気づき、自らが手を繋ぎあって創っていくこと。この活動ポリシーから、我々の主催するものは、指導型、提供型、サービス型の支援ではないようにしている。「共に育つ」という意識は目線を同じくし、共感を心がけること。そして自分達も情報や視野をひろげ、お互いの成長＝育ちあいがあること。コミュニケーションが希薄な時代だからこそ、心のかようなものを創っていく、共に支えあうことが重要ではないだろうか。

1つの例として、健康診査での専門家の対応や、育児書などのパターンやケース紹介があげられる。行政が行うものは、多くの市民を対象にしているゆえに、時間的作業もはかりしれなく、1人1人に合わせた対応をすることも物理的に難しい。そのため、一見にして判断するということをしなければならぬことが多いと思われる。しかし、日々の子育てで、それを親側が考慮することはかなり難しい。そのような中で専門家の発言は指導的と感じ、そして無意識に自分の子を、さまざまな情報の中で紹介されているパターンやケースに無意識にあてはめていくことを繰り返していくことになっていく。場合によってはそれにあてはまらないことで、子育てに自信が持てず、さらに不安や悩みを増大させてしまうこともある。このような場合、「子育て」がパターンやケースに当てはめてできるものではないことを

親として気づくことがなかなか難しく、「その子」との関わりを築いていくことが最も大切だと気づくことに遠回りしてしまうこととなる。

「育児にマニュアルはない、その子との関わりは築いていくものなのだ」と知る機会がない。それはネットワーク発足の中での話し合いや活動の経過、さまざまな活動や事業を通じながら、メンバーたちが自ずと気づいていったことのひとつである。そのことを「親となる前や親となり、なるべく早いうちに知っていたらどんなによかったか」。それは、子育てでの余計な不安感や孤独感の軽減、子(個)のさまざまな発達に好影響をあたえることにつながる。これも活動や日々の生活から多くが得た貴重な体験＝気づきである。「今必要としていることの実現だけではなく、そのことを多くの親たち、子育て仲間たちが自ら気づけるよう届けたい」という思いが、活動意義を感じ、さらなる活動意欲に繋がっている。同じ親としてわかりあえるからこそ、そのメッセージにも気持ちにも「共有」「共感」の意味が込められている。また伝え方、伝わり方も子育て当事者のニーズに即しているものだからこそ受け取る側もキャッチしやすいのである。

このような方針で活動を展開する子育てネットワークであるが、住民であり、子育て当事者であることによる活動の限界はあると思われる。そこに行政や専門職と協働して、地域の子育て支援を充実させていく必要性があり、行政や専門職の支援を期待したい。

E. 結論

「コミュニケーションが苦手など、さまざまな理由で孤立して中々外に出られない、人とつながりがもてない方にもネットワークの存在を知ってもらうことができれば。」との思いは、気持ちを共有できることで孤立から解放されることにもつながり、また、孤立を抑止する可能性も大きいのではないかと考えからである。その思いを届けるために情報通信紙「あいね通信」を地域に広く目にとまるように配布、配置している。しかし実際には、外へ出る機会の少ない人に届けることは難しいとも感じている。常に新たな展開を心がけ努めているが、「子育て」と一括りにいっても、必要なことや求められるニーズはさまざまである。子育て支援は、官や民、地域とさまざまなところから支援すべきであり、行政や地域社会がハード面から、子育て当事者、様々な世代がソフト面から支えあうことが最も有効ではないだろうか。そして行政や専門職と住民や子育て当事者という別々の関係ではなく、両方が同じテーブルで向き合い、共に話し合えること、長期的ビジョンをもって街づくりとして考え、築いていくことが必要である。子育て当事者のニーズに即したものを展開していくためには、子ども、親の声を聴き、お互いを認め合うことから始めることが望まれる。

【参考文献】

1. 中西正司・上野千鶴子、「当事者主権」、2003、岩波書店
2. 斉藤 進、子育てネットワーク活動の意義とその育成支援に関する研究、平成 14 年度厚生労働科学研究(子ども家庭総合研究業)「地域における子育て支援ネットワークの構築に関する研究」(主任研究者 中村敬) 報告書、2003、pp. 91-102
3. 星 旦二、育児不安の規定要因に関する研究、平成 14 年度厚生労働科学研究(子ども家庭総合研究業)「地域における子育て支援ネットワークの構築に関する研究」(主任研究者 中村敬) 報告書、2003、pp. 127-142
4. 今どき子育てフォーラム SAITAMA 編、第 6 回研究会「子育てインフラとしての市町村子育てネットワークの可能性」、2003

平成15年度厚生労働科学研究費補助金（子ども家庭総合研究事業）

地域における子育て支援ネットワーク構築に関する研究（主任研究者 中村 敬）
分担研究「子育て不安軽減のための地域における子育て支援活動の展開に関する研究」
研究協力者報告書

市民の自主グループを保健師として支援した事例

臺 有桂

（順天堂医療短期大学看護学科）

【要旨】

両親学級に参加した市民が地域で子育てを支え合うための自主グループを作った。

活動開始時期には「核となる市民との出会い」「語り合う」「共に考える」ことがネットワーク構築のプロセスとして、重要な要素と考えられた。また、ネットワーク構築を支援する行政職・専門職は「活動の必要性・自分の役割の認識」「情報の伝達とコミュニケーション能力」「市民を信じる」「活動の基盤を整備する」姿勢や役割を求められることが示唆されたので、ここに報告する。

【Key Words】 子育て支援 自主グループ 保健師

A. 研究目的

市民による地域の自主グループ形成のプロセスを明らかにすることで、今後の子育て支援ネットワーク構築への示唆を得る。

B. 研究方法

1. 研究対象

首都圏近郊市町村における市民の子育て支援に関する実践活動事例

2. 研究期間

平成9年5月～平成11年3月

3. 分析方法

事例の活動経過に沿って、活動内容・保健師の支援内容・市民の反応の実際を記述する。記述された活動から、子育て支援ネットワーク構築への専門職（行政職）のあり方を考察する。

C. 結果

1. 事例の概略

市の両親学級に参加していた2組の夫婦に、公民館主催の子育て講演会に先輩夫婦として妊娠出産育児体験を話してもらったことをきっかけとし、市民からをしたいとの声が上がって始まった活動である。

2. 活動の経緯

事例の活動の経緯を、関わった保健師の視点から整理・記述した。

〔両親学級への参加〕 平成9年5月

両親学級は、従来から実施していた母親学級に、男性パートナーが妊婦体験やグループワークをす

るカリキュラムを加えて、毎月3回を1コースとし市が開催をし始めたところであった。

平成9年5月のコースのおよそ10名の男性参加者の中にA・B氏が参加をしていた。パートナーのグループワークは、妊娠出産育児を通して、夫婦や家族のあり方を考えるきっかけを提供することが目的であった。そこで、妊婦シュミレーターによる妊婦の疑似体験をもとに、妊娠出産育児を夫婦でどう迎えるかを自由に話し合ってもらった。担当保健師は、パートナーは家事を手伝うべきではなく、その夫婦の生活スタイルにあった家事に限らない協力の仕方が大切であること、そのためには夫婦間できちんと話し合いをして欲しいこと、育児にはパートナーも含めた仲間や地域のネットワークが大切であることを織り交ぜながら、グループワークの運営を行った。

A・B氏共に、「自分たちは共働きなので、子どもは協力をしながら育てていきたい。」など、自分たちの子育てに対する思い述べていた。また、学級終了後のアンケートに「このような場では、夫は家事を手伝うべきと言われるのを覚悟して参加した。しかし、夫婦で話し合っただけの人なりのスタイルや家族を作っていくことが大切と共感した。」と回答していた。

保健師は、若い核家族が入居する社宅やマンション群をかかえている市の状況から、地域の中での子育てネットワークの必要性を痛感していたところであった。A・B夫婦とも、参加者の中では若干年齢が高めであったこと、産後も共働きをすること、他の参加者にも積極的に声をかけ関わりを持っていたことから、保健師の印象に残っていた。そこから両夫婦は地域のリーダーになっていけるのではと思う反面、共働きだから地域への参加は難しいかもしれないとも感じていた。

〔病院での再会〕 平成9年10月

保健師が地域病院を業務連絡で訪問した際、産科病棟に出産直後で入院しているA氏妻と偶然に再会した。A氏妻は、立ち話であったが「みんなと体験を分かち合いたい。いろんな人に出産の体験を話したい」と保健師に語った。同時に、両親学級で友達になった人たちと、学級終了後もよく集まっているとの情報を伝えてくれた。

市では、妊婦が子どもに接して自分の出産育児をイメージできるよう、また先輩ママからアドバイスをもらうなどの仲間づくりの目的で、両親学級の修了者に各地区の4ヶ月児健康相談の見学を紹介していた。自分の体験を語りたいたとのA氏妻の発言を聞き、保健師は妊婦と4ヶ月児の母との交流は、出産後の母親・妊婦相互にメリットがあるのだと改めて確認することができた。そして、A氏妻に子どもが4ヶ月になったら地区で健康相談が行われること、そこに両親学級に参加した妊婦が見学に来るので、先輩ママとして体験やメッセージを話す場があることを伝え、その場は別れた。

〔プレパママ講座の開催を計画〕 平成10年4月

保健担当課として育児支援を強化する方針が打ち出され、保健師が社会教育との連携を推進する担当となった。そこで、公民館と今後の子育て支援について話し合う機会を設けた。保健師より、母子を取り巻く現状などの情報、親としての心構えの教育や地域でのネットワーク作りを強化する必要があると感じていることを公民館に伝えた。また、子育て支援は、保健・社会教育が個々に取り組む課題ではなく、地域全体での連携が不可欠であると両方で確認し合った。

数日後、公民館から親としての心構えを持つことを目的に、夫婦揃って参加できるよう休日にプレパママ講座を開催することにしたとの連絡が入った。カリキュラムへの助言と出産・育児体験を話してくれる先輩夫婦探しについては、保健分野に協力して欲しいとの公民館の意向であった。

公民館で体験を話してもらう夫婦は、きちんと講座の趣旨を汲んで対応でき、出産・育児で大きなトラブルがないような人が適当だろうと考えた。そこで、A氏妻が以前出産の経験を語りたいたこと、両親学級で印象的だったA・B氏夫妻を思い出した。保健師が両夫婦の地区担当であったことから、両夫婦の出産・健康相談時の母子の状況などからトラブルがなく、順調に経過していることを確認した。両氏には、公民館での講座が開催される趣旨、先輩夫婦には夫婦が協力することの

大切さや、いろいろな人と交流しながら子どもを育てていくことの大切さを体験を通し伝えてもらいたい旨を伝えた。すると、両夫婦とも「これからの人に役立つことができるならいいですよ」と快く引き受けてくれることとなった。

〔プレパパママ講座の開催〕 平成10年8月

公民館の講座では、臨床心理士の講義の後に、A・B夫婦それぞれから先輩として妊娠・出産・育児期の体験を語ってもらった。両夫婦は、実体験を交えながら、自分たちだけでは一人の人間を育て上げることが難しい、地域社会の中でネットワークを作りながら子どもを育てたい、たくさんの人の中で互いに支え合って子どもを育てていきたい、とのメッセージを伝えていた。

講座終了後、両夫婦・公民館職員・保健師で、講座をしてみたの感想から発展し、現在の子育てや夫婦の役割・地域社会とのつながりなどについて、思いつくままに話し合う時間を持った。両夫婦は、生き生きとした表情で、子どもが生まれてから人といろんな話をするのが久しぶりだと、途切れがないほど語り合っていた。保健師は、子育てについて情報提供すること、両夫妻が感じていることは今子育てをしている人が共通に感じていることだろうと共感する姿勢で話し合いに参加した。両夫婦は、時々でもこんな風にいろいろ語り合える機会があったら楽しいだろうと感想を述べ合い、互いに連絡先を交換し合って解散となった。

保健師自身、この話し合いに楽しく充実した気持ちで参加できた。そこから、父親も参加する育児サークルなど、参加したい・楽しいと思える地域のネットワークができるよう何かアクションを試みようとして改めて強く感じる事となった。

〔A氏の来訪と電話〕 公民館講座の数日後以降

A氏が保健師の事務所を訪ねてきた。A氏は、子どもの体調など様子を知らせてくれ、講座の後の反省会で語り合ったことがとても楽しかったと感想を伝えてくれた。そして、集まって語りあう機会がまた欲しいと、保健師に訴えた。

その後も、A氏は保健師の事務所近くに用事がある際には立ち寄り、子どもの成長振りを報告してくれた。同時に、子育てに関連する書籍を持ってきて、「これ読んでみるといいよ。」「子育ては、やっぱりいろんな人と支えあってしていきたい」と重ねて伝えられていた。

保健師は、そのA氏の様子を見て、育児に積極的で活動力もありそうだ、地域の中のリーダーになれるかもしれないとの印象をさらに強くした。そこで、保健師も子育て中の親子で集うことの大切さを公民館での話し合いで痛感したこと、地域の中で仲間を作る必要性があることをA氏に伝えた。すると、A氏は「最初は少人数でよいから、何でも語り合える集まりをしましょう」と反応した。

さらにその数日後、A氏より保健師のもとに電話が入った。子育てが親だけの責任とされたら、これから子どもを産もうと思う人が減ってしまうだろう、社会全体で育てようという体制がないと子どもも親もつぶれてしまうと思う。B氏ともその後連絡を取り合って、語り合っている。今度休日に自主的に集まりを持ってみたいが、保健師も参加してもらえないかとの内容であった。

そこで、上司に市民から呼びかけがあった旨を伝えた。上司は、市民の活動したいという声は大切にしなければいけない、これからの子育てを考えたら地区でのネットワークは必須なので、参加して活動が継続できるよう支援をする必要があるだろう。場所や情報提供は協力できるが、休日のため業務としての公認はできないので、私的な時間を使って参加となってしまうがどうするかと確認をされた。上司と同じく保健師も子育てネットワークの大切さを痛感していたことから、まず個人として活動に参加することを了解し、上司にもその旨を承諾してもらった。

〔第一回の集まり〕 平成10年10月

A氏夫婦と子連れで食事ができる店に集合し、集まりをどのように持っていけばよいのかを相談す

る準備会を持った。A氏からは、情報交換や勉強会など、その都度興味ある話題で話し合える自主グループとして活動をしたい、保健師からは適宜情報提供や活動の支援をしてもらいたいと考えている、と提案された。そのA氏の考えに保健師も合意した。この話し合いをしながら、市民の自主グループ活動であるので、その活動が継続できるようにサポートするのが、行政の保健師としての役割だろうと考えた。そこで、子どもを安全に遊ばせながら話ができるよう、保健担当課が管轄する部屋を提供することをA氏に伝えた。

その月末にA・B夫妻と子ども・保健師の計7名で、第一回の集まりを持った。A氏は、子育てに関する新聞記事の切り抜きを資料として持参していた。子どもを遊ばせたり、ミルクの飲ませ方や発達のことなどを情報交換しながら、その新聞記事を読み合い感想や意見交換をした。また、保健師から、市のイベントや事業のPRなど情報提供を行った。両夫妻は「こうやって人と話すと安心できる。」「いろんな知恵が生まれてくる気がする。」「子どもを自由に遊ばせながら、親も自分の時間を持てることが貴重。」と感想を述べていた。

この集まりに参加し、きちんと資料まで作成してくるA氏の意気込みを大切に、自主グループの運営が軌道に乗るよう支援をするのが自らの役割だと改めて認識を深めた。さらに、また集まりたいと思えるためには「参加して楽しい」「良かった」という気持ちを持つことが大切ではないかと考えた。そこで、もう少し仲間を増やせば情報交換の輪が広がり、活動も継続しやすくなるのではないかと思いつき、A氏に「仲間を増やすために、PRをするのはどうか」と提案した。すると、A氏は「仲間がたくさんいることは心強いが、広くいろんな人が集まってしまうことより、まず納得のいく話しができるメンバーで基盤を作ることが大切だと思う」との反応であった。B夫婦もいずれは仲間を増やしたいが、現時点ではA氏の考えに同感と反応であった。この両夫婦の明確な意向を確認したことから、市民の自主グループなので指導や結論を導く関わりでなく、保健師としての見守りが必要であることに気づくことができた。そして、市民のやる気が損なわれないよう、焦らず支援して行こうと考えた。

〔 第2回目以降の集まり 〕 平成10年11月から平成11年3月

第一回目以降、ほぼ月に一回の割合で集まりを持った。特に役割を決めなかったが、必ず誰かが新聞・雑誌の記事や本の紹介などの資料を持参し、毎回2-3題のテーマで話が広がっていった。

ある時、祭日のため保健師が子どもを連れて参加した。両氏の子どもはいずれも1歳であったが、異年齢の子供同士で仲良く遊んでいた。その様子を見た両夫妻は、家で見せるのとは違う子どもの楽しそうな表情に驚いたと感想をもらした。両夫婦は、話し合いからだけでなく、子どもの遊ぶ様子や他者の関わり方からも、改めて仲間や社会とのつながりの大切さに気づく場面があった。

また、ある回には地区担当のC保健師が参加した。しかし、その回は話の盛り上がりを感じるものが少なかった。後日、事務所を来訪したA氏夫によると、自由に話をすることが楽しいと思っていたので、C保健師の指導的で答えを探そうとするやり取りの仕方は、ちょっと場にそぐわなかった気がしたのだとの感想であった。保健師自身もその日の場面を振り返り、行政と市民の質疑応答のようになってしまっていたことに気がついた。事前にC保健師に活動の趣旨を十分理解してもらうよう働きかけ、その場で介入をすればよかったと反省をし、改めて専門職の関わり方の重要性を痛感したのだった。

〔 職場復帰とA氏夫婦の転居 〕 平成11年3月末

A氏は、集まりの間にも時折の保健師の事務所に顔を出しては、本の情報を教えたり、育児の話をしぼらくして帰っていくことがあった。保健師も行政のイベントや情報をその都度知らせるなど、関わりを持っていた。

ある日、A氏が来訪し、妻の職場復帰、自分転職と重なり、子どもの保育所やこれからのことを考

え、子どもの制度が整っている実家のある市町村に急遽引っ越すことになった。仲間ができたので離れがたいが、子どもの保育所や生活のことを優先せざるを得ない。せっかく定例で集まっていて楽しかったが残念だと、保健師に伝えた。この話をB夫妻にも伝えたところ、A夫婦が転居してしまうのは残念だと寂しがった。しかし、自分たちも保育所に子どもを預けながら共働きをしているので、やむを得ない事情も理解できる。また時々会いたいと述べていた。保健師としても、せっかく盛り上がってきていたし、これから地域に広げていこうという矢先だったため、大変残念に思った。しかし、その反面、A氏の活動力があればここでの経験を生かして、新地区でも活動を何らか始めていくことだろうとも考えられた。そこで、A氏にはこれからも子供たちのためにできることに取り組んで欲しい旨を伝えた。自主グループの活動を始めたばかりであったが、A夫婦の転居、両妻の育児休業明けに伴い、継続が困難となった。

3. 保健師が行った働きかけ

活動の経緯に沿って、主な「出来事」における保健師の「意図・思い」「働きかけ」、その結果としての市民の「反応」についての視点からまとめを行った。

出来事	保健師の意図・思い	働きかけ	反応
両親学級 夫のグループワーク を実施する。	育児には地域のネットワークが 大切。家事を手伝うだけが育児参 加ではないので、夫婦や家族のあ り方について妊娠を機に考える きっかけとなればいい。 A・B氏夫婦とも積極的で熱心 だ。地域の核になりそうな人たち だ。	生活スタイルに合った夫婦の あり方を話し合う大切さにつ いて、グループワークで伝え た。	A・B氏夫婦熱心に実習・デ ィスカッションに参加して いた。 学級終了後の感想に、A氏夫 は、夫婦で話し合う大切さに 共感したと書いていた。
病院で、出産直後の A氏妻と再会する。	先輩ママとして、地域の中で支え 合ってもらえるといい。	4ヶ月健康相談時には、体験を 話す機会があるので参加して 欲しいと伝える。	A氏妻は、楽しみにして、必 ず参加すると話す。
公民館とプレパパ ママ講座を共催する こととなる。 体験を語る先輩夫婦 を探す。	体験を人前話すとなると、誰でも よいわけでない。適任を探さねば ならない。A氏妻は以前語りたい と言っていたし、両親学級で印象 的だったA・B氏夫妻はどうだろ う。	先輩夫婦として、A・B氏夫 婦が適任と思い、両者に公民 館での講座の目的を告げ、体 験談をお願いできないかを伺 った。	A・B氏夫婦共に、これから の人に役立つことができる ならいいですよ、と快く受諾 してくれた。
プレパパママ講座を 開催する。	みんな楽しそうな様子をしてい る。こんな風に地区の中で父親も 巻き込んで育児サークルができ てもいいだろう。これだけ話が盛 り上がっているの、少し後押し をしてみよう。	講座終了後の反省会にて、保 健師として地域の中で子育て をめぐって最近気になること や現状、個人として子育てを してみても、アドバイスで はなく情報として話題提供を した。また、A・B氏夫妻が 感じていることは、今子育て をしているみんなが共通に感 じていることではないか、と いう旨を伝えた。行政が子育	A・B氏夫妻共に、社会の中 で子どもを育てたい、互いに 支えあって子どもを育てた い、と話す。みんなと語り合 うことは、楽しいだろう。両 氏は互いに連絡先を交換し 合っていた。

出来事	保健師の意図・思い	働きかけ	反応
		て支援として担える限界と、 市民が自ら動く必要のある部分があるのではと投げかけた。	
A氏から保健師に連絡が来る。	市民が動こうとするせっかくのチャンスだから、何とか支援をして今後の地域活動につなげたい。	A氏の集まりたいという思いに対し、とてもいいことだと伝えた。 上司に市民から参加の呼びかけがあった旨と、参加の許可を得る。	A氏夫、反省会での話し合いが楽しかった。是非仲間で集まってみたいと思うので、保健師に支援をして欲しい。
A氏夫婦と準備会を持つ。	市民から動き始めた活動であるから、A氏の意図を尊重しよう。	A氏の会の持ち方に合意する。	A氏は情報交換をしたり、勉強会をしたり、その都度興味のあることを雑談しながら話しをしたいと提案した。
	活動が継続できるよう、子連れでも安全な場所を提供しよう。	会場は市保健課が管理している場所を提供することを伝える。	落ちついて、気兼ねなく集まれる場所が確保できて良かった。
初回の集まりを持つ。	継続するには、楽しい、よかった、など次回も集まりたいという気持ちを持ってもらいたい。AB氏夫婦とも、意思を明確に持っている方たちだから、指導的に関わるのではなく、ざっくばらんに個人として向き合うようにしよう。	子育てや市の施策などの現状や情報を話題提供した。AB氏夫婦からの話題提供には、専門職として、一人の母親としても意見を述べた。	AB氏夫婦ともに、こうやってみんなで集まって話すと、安心できる。いろんな知恵が生まれてくる気がする。子どもを自由に遊ばせながら、親も自分の時間を持てることが貴重だと話す。
	この会を育てて、地域の中で根付くようにしたい。メンバーが増えた方が活動を継続しやすいのではないか。	メンバーを増やすならあちこちに働きかけをすることができると提案する。	A氏は、仲間がたくさんいることは心強いが、広くいろんな人が集まってしまうことより、まず納得のいくメンバーで基盤を作ることが大切だと思うと話す。
月一回程度の集まりを持つ。	自主グループの運営が軌道に乗るよう、情報提供や支援の体制を整えよう。また、参加している中から学び取れる機会なども考えていけるとよいだろう。保健師として市民の思いを尊重し、見守りや必要な支援を行っていこう。	行政のイベントや情報をその都度知らせた。 別の地区担当保健師にも参加してもらった。 子供たちは保育所の中で、自然に他年齢の子や先生と関わるので、親だけで担ってるわけではないと伝える。	自由に話をするのが楽しい。指導や答え探しの話し合いではないのだが・・・ 異年齢や子ども同士の関わりはとても大切だと痛感した。
A氏の転居により解散となる	せっかく盛り上がってきたのに残念だ。これから地域に広げていこうという矢先だったのに・・・	A氏には、これからも子供たちのためにできることに取り組んで欲しい旨を伝える。	A氏夫が保健師の事務所に来所し、急に引っ越すことになった。せっかく定例で集ま

	でも、A氏ほど意識が高ければ、 ここでの活動を生かしていくこ		っていて楽しかったのに、残 念だ。
出来事	保健師の意図・思い	働きかけ	反応
	とだろう。		B氏は、A氏夫婦が転居して しまうのは残念。しかし、 時々情報交換したり、会いた い。

D. 考察

子育て支援ネットワークを構築する際のプロセスについて、事例を通し保健師の視点から考察したい。

1. ネットワーク構築のプロセス

1) 核となる市民との出会い

事例では、両親学級に参加したA・B氏が印象的であった。しかし、そこからすぐにグループ作りに発展したわけではなく、公民館の講座で先輩夫婦を探していたこと、保健師が両氏の地区担当に異動したこと、講座の反省会で話が盛り上がったこと、などの出来事が一つ一つ積み重なって、A氏が活動の核になれる人材だと確信することができた。そして、結果的にこれらのことが、自主グループの発展に結びついている。日常の中のちょっとした出来事や市民の様子などを気に留めておくことは、活動のきっかけづくりに結びつくことがある。日頃から市民と接し、その声に耳を傾け、地域の中で起きている出来事に関心を持つことで、市民の持つ可能性を見出し、芽生えたきっかけを逃さなくなると考えられる。偶然にきっかけと出会うこともあるが、やはり日頃から意識をしていないと、その出会いすら見逃してしまうことがあるのではないだろうか。地区活動を意識的に行うことは、地域の中に芽生えたきっかけと出会え、タイムリーな介入を可能にするなど、ネットワーク作りの第一歩に結びつくと考えられる。

2) 語り合う

事例では、両親学級のグループワークや公民館での反省会など、自分たちの思いを語り合う機会があった。自由に語り合うことにより、自分を表現してよい安心感や楽しさを感じ、さらに語り合いたいという気持ちを生み出す。この語り合うことへのポジティブな受け止めが、自分の思いや気づきは自分だけの問題ではなく、他者もまた同じような問題を抱えていることに気づき、その思いの共有から活動につなげたいという原動力を生み出すのではないかと考えられた。

3) 共に考える

市民と専門職（行政職）、または市民同士が語り合うことは、活動を生み出す原動力であると前述した。じっくり時間をかけ話し合うことは、市民の気づきを促すことになる。A氏は、指導的な専門職の関わり方に違和感を感じていた。その日の話が盛り上がらなかったことを考えると、両夫婦とも、その場にいることに心地よさを感じられなかったのではないだろうか。専門職として関わる際に、先を焦り、こうしたらと提案・指示したくなってしまうときがある。しかし、A氏がまずは納得のいくメンバーで集まりたいと語っていたことを加えて振り返ると、活動の初期にはあまり誘導的に関わらず、共に参加し考える姿勢が、核となる市民のやる気を育むために大切なのではないかと考えられた。

2. ネットワーク構築における行政職または専門職

ここでは、主に市民のネットワーク活動を支援するために、専門職（行政職）のあり方について考察をしたい。

1) 活動の必要性・自分の役割の認識

まず第一に、専門職として市民のネットワーク活動を支援する場合、その活動の必要性や地域へ与

える影響を認識しておかねばならないだろう。地域で何が求められているのか、市民は何を感じているのかという認識がないと、活動の核となる市民との出会いも見逃したり、声を挙げている市民をサポートする必要性に気づくことができないのではないだろうか。また、地域の問題は、行政や専門職が担うものと考えてしまうと、市民の持つ可能性を狭めてしまうことになりかねない。そして活動の段階に応じて、積極的に仕掛けをする、共に活動をする、見守りをするなど、その関わり方や役割を変える必要があると思われる。このために、自らの職種・組織の持つ専門性とその役割の限界を把握しておくことも、関わりに大きな意味をもたらすだろうと考える。

2) 情報の伝達とコミュニケーション能力

活動を支援するには、まず「情報を分かりやすく伝えること」が大切である。専門職は、専門的なことを担う役割があるため、市民に接するときも指導的になりやすい。しかし、専門的な観点から、情報や知識を分かりやすく伝えることが、本来の専門職の使命であろう。相手となる市民の力量やニーズを見極め、市民が必要とするデータや情報をわかりやすく伝達する。この情報の共有は、市民と共に語り合い・考えあうこととなり、活動を生み出す力を育むことにつながっていくと考えられる。事例のA氏は、地域の中での子育ての現状を知り、自らの子育て体験と重ね合わせることによって、地域の中で支えあう活動の必要性に気がついた。現状や情報を伝えることは、市民の気づきや活動の意欲を育むことにつながるだろう。

また、市民が資源として活用したくなるような、専門職としての力量はもちろん、さらには個人として語り参加する姿勢を示すことも、互いの関係を作り出すのに重要な要素であると考えられる。

3) 市民を信じる

市民を支援する活動では、市民のニーズや活動の段階に応じた関わりをすることが必要となる。結果的に両者の目指す方向が一致することも多いだろうが、行政職や専門職がこうして欲しいと考える活動では、市民は主体性を失いやすい。その活動のプロセスにおいて、市民が自ら考え、目標を決め、軌道修正などをしながら方法を検討していくことが望ましいと考える。市民はいろんな思いを抱え暮らしていること、そしてその当事者であることから、たくさんの秘めた力を持っていると信じることで、市民のネットワークを育むのに、とても大切なことであると言えるだろう。

4) 活動の基盤を整備する

市民が活動するとき、専門職や行政職として専門的な支援が必要な場合がある。せっかく市民が活動の必要性に気づき、活動を始めたとしても、さまざまな原因で継続が困難となることがある。そのような場合、活動方法等の相談に乗ることは、支援の一つの方法である。また、活動の発展継続のために、PR活動の手助け、活動発表など評価の場を設けることを支援し、市民の活動意欲を維持向上させるためのソフト面への働きかけが専門職に求められることがあるだろう。

さらに活動の継続支援のために、情報の提供、活動のPR、場の提供、予算の確保などハード面も含め、その活動の状況に応じた支援を行うことが、行政職・専門職の大切な役割であると考えられる。

E. 今後の課題

紹介した事例は、開始したばかりの半年間の活動をした時点で、A氏の転居や保健師の退職等の事情が重なり、継続ができなくなってしまった。そのため、この会が今後どのような活動展開になったのか、残念ながら見届けることができていない。今後も他の活動事例などを分析し、子育て支援ネットワーク構築のための支援のあり方について、さらなる検証を重ねていきたい。

その後、A氏夫は転居先で保育園の保護者会長をし、地元の市民や議員らと子どもの健全育成に関わる活動を続けているそうである。B氏夫も、同じく保育園の保護者会長、市の代表等を務めていた。この自主グループ活動が、彼らのその後の活動の原点であるとするれば、短期間の活動であったが意義深い活動であったと言えるだろう。

参考文献

1. 世古一穂著. 協働のデザイン. 学芸出版社, 2001.
2. L.M.グティエーレス他編著. ソーシャルワーク実践におけるエンパワーメントーその理論と実際の論考集ー. 小松源助監訳. 相川書房, 2000.
3. 辻山幸宣編著. 住民・行政の協働. 第3版 ぎょうせい. 2000.

分担研究「子育て不安軽減のための地域における子育て支援活動の展開に関する研究」
研究協力者報告書

共に生きる社会を目指すNPO活動の活性化要因に関する一考察

山口 忍（順天堂医療短期大学）

【研究要旨】

一人ひとりが共に生きる社会を望み、その実現に向けて様々な事業を展開し活動しているNPO法人「パーソナル・アシスタンスとも」で活動している10名のメンバーを対象に活動を行ったきっかけ、活動を継続している理由とメリット、活動で困っている事とデメリット、学んだことを自由記述で調査した。その結果「とも」の活動を活性化している要因として、新しい考えで自分達の手で創っていこうという①パイオニアの姿勢をもつ ②自分達の理念をもつ ③相互のやりとり ④実践 ⑤運営基盤 ⑥充実感 ⑦自己成長 ⑧楽しさ ⑨社会とのつながり ⑩情報の発信 の10項目が示された。

【見出し語】 NPO ・ 活性化 ・ 共生

1. はじめに

東京近郊で、異なった一人ひとりが共に生きる社会を望みその実現に向けて様々な事業を展開し活動しているNPO法人「パーソナル・アシスタンスとも」（以下、「とも」とする）がある。「とも」は2000年に設立されて以来、勢力的に活動を行っている¹⁾。そこで、今回、NPO活動の活性化要因の基礎資料をえるために活動しているメンバーを対象に調査を行ったので報告する。

2. 「パーソナルアシスタンスとも」について

1) 設立までの経緯と理念

「とも」の前身として、1992年に障害を持つこどもの親を中心とした「共に歩む会」が設立された。障害児をもつ3人の母親が「子どものために何かしたいね」と雑談したのが活動の発端であった。以来、母親を中心に育児に伴う情報交換や子どもが楽しめるイベント等を行っていたが子どもの成長につれ、父親も加わり行政に要望や提案をするようになった。夫婦で活動するメンバーが多いことは本会の特徴である。活動の大きな成果として、「障害の有無に関わらず普通学校に行きたい子どもは全員が普通学校に行く」という教育施策ができたことである。その他にも「共に歩む会」が行政との話し合いの中で作り上げてきた障害児支援は多々存在する。このような活動を8年間続け、東松山市の生活支援センター「ひき」との出会いがあったことをきっかけに「当たり前暮らしをあきらめずに自分達で創ろう」と、当事者だから分かるニーズ、望みを実現する事業の実施を目指してNPOを設立した。

現在、障害を持っていても年をとって介護が必要になっても、一人ひとりが住みなれた地域の中で人権が守られその人らしく「ふつう」に暮らせることを理念に活動している。壁をつくらず「みんないっしょ」24時間365日、年齢や障害の有無に関わらず、地域で生活を送る上で、手助けを必要とする時にその人に合わせた支援をすることを目指している。

2) 現在実施している事業

現在実施している事業を資料1に示す。介護保険法、地域生活支援費制度、行政からの委託事業の増加に伴い事業が増えていった。

3. 調査方法

「とも」の活動メンバーから協力を得られた10名を対象に、平成16年2月4日から10日間の留置法で実施。自由記述による調査票を活動会場に設置し、メンバーが記載した後厳封の上回収。倫理的配慮として、事前に会合の際に代表及びメンバーに調査の実施と論文にまとめることへの了解を得た後、調査担当メンバーと配布回収方法を決定し、調査依頼文書を作成し、調査票に添付した。

調査項目は、記載者の属性に関すること、活動を行ったきっかけ、活動を継続している理由とメリット、活動で困っている事とデメリット、学んだこと、今までに困ったこととした。

4. 結果および考察

1) 回答者の属性

回答者は10名であった。性別は男性2名、女性8名、年齢は40代4名、20代3名、30代、50代、60代は1名ずつであった。職制は、副代表2名、理事4名、職員4名で常時活動しているメンバーである。また、夫婦で活動しているものは2名であった。

2) 活動を行ったきっかけ(表1)

表1のNo1~10にあるように「とも」の理念に共鳴して活動を行ったという理由が多かった。「共に生きる・育つ」を活動理念としている「とも」ではノーマライゼーションを自分達の手で実践していくという明確な目的を持っているため、その理念に賛同する人たちが集まったと思われる。行政が補いきれない「落ち、もれ、谷間」を埋めるのがNPOの役割²⁾と言われているように、参加しているメンバーはNPOの役割を果たしたい気持ちを持っていることは明らかである。ノーマライゼーションという新しい考えで、自分達の手で創るという姿勢が当事者性の有無に関係なく「とも」への参加を促したと思われる。まさに、パイオニアとしての姿勢を持った人たちが集まったといえ、活動の活性化にはこのようなメンバーの存在は重要である。また、活動の理念を持つ事の必要性も再確認できた。理念とは「何を最高のものにするかについての、その人の(面)での根本的な考え方」(新明解国語辞典)であるため事業方針や目標はそれに沿って作られる。「とも」の理念は机上のものではなく、8年間の市民活動に裏付けられて作られたものである。「企業は利潤を追求するが、NPOは理念を追求する」と代表の夫が言うように、理念は活動を支える基盤である。自主活動においても、活動を目的にするのではなく活動のもとになる考え方を、メンバー間で話し合い理念を持つことが必要である。

またNo11,12にあるように「とも」の活動をメンバーや機関誌を通じて知ったことで参加したとの回答もあった。「とも」の活動は機関紙やホームページにより常に外へ発信されており、その内容や構成は手作り、活動を楽しんでいる様子や、生活での嬉しい事や困っている事が掲載され、生き生きと活動している様子が伝わってくる。躍動感を持つ機関誌やメンバーの姿は、当事者でない人も関心が高まったと思われ情報の発信が会と地域を結ぶ上で重要であるこ

とを示している。

3) 活動の継続理由・メリット (表 2)

No1~8にあるように、理念に即した活動を行えることが主な継続理由・メリットとして挙げられていた。また、「9.何が必要かを考え考えたことに向かって行動しているという確かな手ごたえ」「No25.投げ出しては今までのことが無に帰する」とあるように、実践のそのものが大きな活性要因となっている。これは、代表の「どんなときでも何かをやっている、次何かがうまれる」という「実践ありき」の前向きな姿勢が影響していると思われる。

実践は、No10.11のように充実感、No12~15の楽しさを感じることで、No19~23の自己成長、につながっており、代表が提案する事業や活動を実践することで、充実感、楽しさ、自己成長を感じているという「とも」の活動が浮き彫りになった。代表とメンバー間で相互のやりとりで活動が積み重ねられている。「No27.地域の中にはわれわれを支えてくれる人もいる」と、地域社会とのつながりを実感していた。このことから、会ができることを地域に活動として提供し、地域社会から理解を得て、地域の力が会に再び提供されている姿がうかがわれる。代表とメンバー間で、会と地域社会などさまざまな場面で、相互のやりとりがあってこそ「とも」の活動が継続、活性化しているのではないかと考えられる。

4) 活動で困っていること・デメリット (表 3)

No1~4の運営資金の脆弱さや、No5~13の人材育成に関することが多く、運営基盤が整備されていないことが示された。次いでNo14~21の責任の重さや、No22~29の時間の余裕のなさに関する記述であり、これも「とも」で活動する人材育成に関することであり、運営基盤の整備が急務であることを示している。「No32.行政とのパートナーシップ」「No33.ボランティアを集める事」があげられ、行政や地域との新しい関係を再考する必要があると思われる。「とも」の活動は、市民活動から発展したものであるが、NPOとなっている今、ボランティアではない「とも」の地域社会での役割や立場を整理することが必要と思われる。

5) 活動の中で学んだこと (表 4)

No1.No5にあるように、今までの思考ではなく新しい考えが芽生えている記述がみられた。また、No17.No21など普段の生活では体験しづらいマイノリティの人たちとのコミュニケーションに関する学びもある。No8.No.13からは、困難なことが多いなかでもパイオニアであることに誇りを感じ、充実感を感じながら活動している姿が伺われる。

6) 今までに障害児を育てる(かかわる中)上で困ったこと (表 5)

16件の記述があり、今なお「障害」への理解が低いことが示されている。「障害を持っているかた、その家族が地域で暮らし続けていくことはホントに大変」の記述があるように、地域社会の理解がなければ生活しづらいのが現状である。今後は早急に障害児への支援を検討することが不可欠である。

5. まとめ

これらのことより、「とも」の活動を活性化している要因として10項目が考えられた。新しい考えで自分達の手で創っていかうという①パイオニアの姿勢をもつメンバーが ②自分達の理念をもち会を構成していた。地域と会、代表とメンバー間で、③相互のやりとり ④実践をかさねており、⑤運営基盤に関する課題はあるが、活動からは⑥充実感 ⑦自己成長 ⑧楽しさ ⑨社会とのつながりを得ていた。地域の理解を得るには⑩情報の発信が重要であった

【引用文献】

- 1) 浅野史郎, 西田良枝, 地域の福祉力を高めよう. 介護保険情報. 4 (3) . 32-43. 2003
- 2) 石川左門, 木下安子, 介護保険と市民活動. 第 59 回日本公衆衛生雑誌. 47 (11) . 362. 2000 .

表1 活動のきっかけ

No	内容
1	自分達のほしい地域を自分達の手でつくっていこう、行動していこうという夢に共鳴した
2	ノーマライゼーションの理念を実践する「とも」の理念に賛同したから
3	障害を持つわが子の将来には「とも」のような活動が不可欠と思ったから
4	障害児を育てている親として、こんなサービスがあつたらいいなあと思うことを行政まかせに何年も待つのではなく、誰もやってくれないなら自分達でやるしかないと思って
5	子どもの年齢とともに地域に住み続けていく為には、生活支援がどうしても必要であるが、行政では無理だと判断。そのニーズや利用者の気持ちにそったサービスを提供出来るのは当事者である私達であると考えたから
6	施設のような「箱」で生活させることは絶対させたくないこともあります
7	当たり前で地域で生きるのが当たり前な社会にしたいです
8	以前入所施設に勤務していて、ご自宅に帰省する利用者さんの嬉しそうな表情をみて、地域で生活する方の側を支えたいと感じた。支えがないと地域で暮らせず仕方なく入所施設を選んでいると感じた
9	子どもへの余暇支援（療育も含めて）をしたいと思ったから
10	以前、地域生活支援センターで非常勤として働いており、「とも」で働きたいと思ったため。
11	代表と知り合いボランティアとして関わるうちにより深く活動したいと思ったから
12	「とも」の理念に賛同し機関紙を読み NPO 設立を知り正会員となった

表2 活動を継続している理由(メリット)

No	内容
1	子どもの将来の生活基盤をつくれる
2	子どもの将来を安心できるものにした
3	我が子と自分のため
4	将来にわたって地域の中で、障害児/者の生活を支援するシステム（24時間365日）の必要性を感じるから
5	障害児が色々な人と関わったり、自分らしい時間を楽しんだり意思を主張したりと様々な姿が見え、このサービスはなくては困ると感じているから
6	全ての方が自分の望む生活をして欲しいと思っており、選択肢の一つに「とも」があるならば、よりよく生きていくための支援をしていきたいと思っているため
7	障害の有無にかかわらず地域で暮らすという事を素晴らしい事を知ったから
8	より良いサービス事業者として、またそのことを地域に伝えていくことなど、地域を変えていく可能性を持ち続けられること
9	何が必要かを考え、考えたことに向かって行動しているという確かな手ごたえ
10	利用者の方々の生活をみて確かに役立っていると感じた時の充実感
11	子どもがその子らしい良い時間を過ごしていることで、1人の社会人として仕事出来るやりがいを感じているから
12	楽しいから

13	皆の輝ける瞬間を見る楽しさがある
14	利用者さんと活動、生活が楽しめる
15	楽しく生きていけること
16	自分自身と向き合うことができること
17	子供が障害者であることでずっと福祉にこだわって生きてきたが直一層その分野の視野をひろめることができた
18	他の障害を持つ人やその家族とたくさん出会えること
19	自分自身の勉強になる
20	何か自分自身も癒される
21	障害のある人と接することで自分を見つめなおすことができる
22	いろんな経験ができる
23	自分も成長させてもらっている
24	10年くらい積み上げた友達関係
25	各々、継続は難しいが、投げ出しては今までのことが無に帰する
26	社会とのつながり
27	また、地域の中にはわれわれを支えてくれる人もいるのだと実感できること

表3 活動で困っていること(デメリット)

No	内容
1	事業所として運営するにはあまりに財政基盤が弱い。税制など優遇措置もあるが規制が多すぎるので緩和して欲しい
2	安定した財源がないので、マンツーマンのサービスを続けることに困難を感じる
3	法人の性格上、運営も経済的に困難である
4	医療現場に対して収入が大幅に減少した
5	メンバー間での温度差
6	理事が正会員を巻き込む努力をしないがどうしても難しい
7	お母さん同志という関係では仕事は出来ないが、仕事に対するスタンスがバラバラな為、難しさを感じる
8	メンバー間でゆっくり話し合う機会がなかなかとれない
9	こうした事業所は、小さい所帯でやっているところも多いと思うが、「とも」は大所帯なのでコミュニケーションがとりづらい
10	トップダウン方式ではないが、上の考え方がケアスタッフには分かりづらい
11	「手作り」という言葉が似合う法人ですが、多くの人は何でも業務等を自分だけで抱え込んでしまふ所があり、「NPOは事務能力が低い」という世間一般の評価を覆うにいたっていない事に困難を感じる
12	また事業全てを把握しきれない
13	職員の子どもの預かたりすることが多く、ケアする際の線引きが難しい
14	自分では精一杯にやってるつもりでもなかなか期待されるとおりにはいかずストレスが溜まる